教育における「音楽」の役割

――即興アンサンブルの試みを通して――

村山　順吉

赤ちゃんが、まだ母親の胎内にいる時から、様々な音を聴き、或いはそれに反応することは、よく知られている。また、まだ言葉が言えるかどうかという時期の幼い子どもが、大人が理解に苦しむような音楽に、静かに聴き入ったり、反対に大人が喜んで聴いている音楽に、唯一人怯えたように泣き出したりする、その子ども独自の感受性による反応を示すことも、事実なのだ。そして幼い子ども達は、彼等の泣き声の微妙な変化ひとつにも、その子の状態や欲求を敏感に察知してくれる、実に繊細な耳を持った母親との一体となった時期を、その人生の第一歩として過ごすのである。

このような、母親との繊細なやりとりの中で成長してきた子ども達に、初めて意図的に音楽教育を行なうのが、殆どの場合、幼児教育者である。とすると、これは畢竟、幼児教育者を養成する側が、音楽

教育についてどのような視点を持ち、具体的にはどのような指導を行なっているかが、特に関係者の間で常にとらえ直されていなければならない、重要な問題であるということなのだ。

日本の音楽教育について考えてみると、学校での授業にせよ個人レヴェルのお稽古事にせよ、すぐ頭に浮かぶのは「ピアノ」或いはその代用品としての「オルガン」である。そして、教員養成課程においても、多くの場合、音楽の授業の中で「ピアノ」に置かれた比重は大きい。確かに「ピアノ」は、一度に沢山の音が出せるという点で便利な楽器ではあるし、私自身、「ピアノ」の演奏活動を続けさせていただいている立場から、「ピアノ」そのものを否定するつもりは毛頭ない。ただ、恰も「ピアノ」が弾けなければ音楽教育が成り立たない、またそれ故に、「ピアノ」の演奏技術の向上が「音楽性」の向上とイコールであるかのように、そして学生達を横一線に並べて、ヨーイ・ドンとばかりに為される音楽の授業があるとしたら、これは既に憂慮される等という事態を越えていると思うのである。

今ここで、音楽の本質について、音楽美学的な側面から言及するつもりはない。しかし、教育の中で「音楽」が果たし得る役割があるとするなら、それは競争原理が横行するこの社会や学校にあって、音楽においては、人は本来の自分自身を取り戻すことができる、そしてまた、自分とは違った他者と、音楽を共有することによって共存し得ることを、実感することなのではないだろうか。

では、どのような方法でなら、具体的にそれが実現できるのだろうか。次に、昨年から私が児童学科の授業の中で、試行錯誤をくり返しながら行なっている、ひとつの試みについて、御報告させていただくことにする。

この授業は、本来ピアノを扱う楽器の時間である

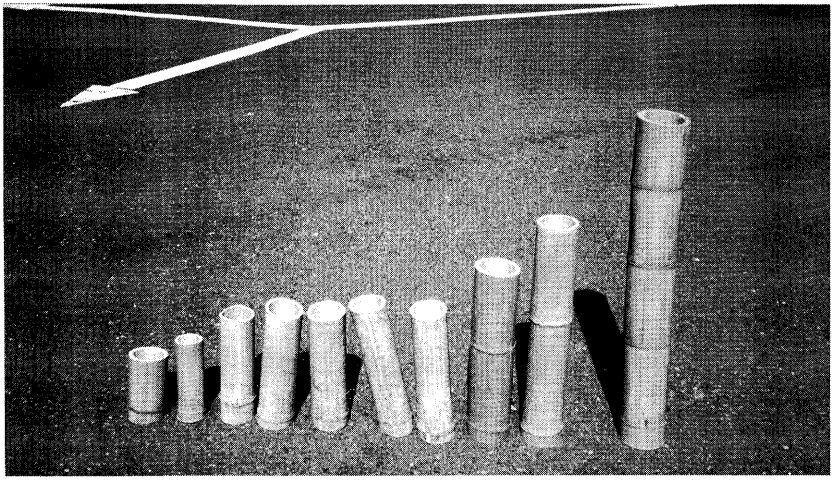
にもかかわらず、楽器も楽譜も何もない状態から始まった。これは、先ず初めに、そこに集まった人間の存在、即ち人格を、この授業の基本として考えたからである。何故なら、この授業でこれから生み出される音が、それぞれの人格と結びついたものであってほしい、逆に言えば、その音が、その人そのものを表しているものであってほしいからである。

さて、日常生活において我々は、一体どれだけの音に囲まれているのだろうか。手始めに、キャンパスの中で、それらの音を意識して聴くことを試みた。初めは、あまり聞き分けられなかった学生達も、時間の経過とともに、少しずつ聞き分けられる音の数が増し、結果的に数十の音が確認された。

渡辺護氏はこのような音を、(1)日常音（音そのものに意味はなく、例えば何かが動いた時、それに伴って発せられる音）、(2)語音（概念的内容を示す声音や信号音）、(3)音楽音の三種類に分けている。(1)我々も、それに倣って、確認された数十の音を分けてみた。そして、特に「音楽音」が、単なる音響学的な楽音とは違い、音楽の中で音楽的意味を持って鳴っているものであることを認識した。それは、音楽音と音響学的楽音とが、たとえ物理学的にみて同じ音であったとしても、この授業が、音響学的な楽音としてしか音を扱えないとしたら、これはもう音楽の授業とは言えなくなってしまうからである。

次に、ではどうやって、自分の音を生み出すかを皆で考えた。そして、ただ闇雲に音の出る物を探してくるのではなく、自分の音を、まだ音のない段階から手づくりで生み出すことにした。ただ、あまり難しい作業はできないこと、さらに、できた物が楽器として、またその後の加工にも耐え得るものとして、先ずは素材として竹を選んだ。

幸いにして近くに竹林があり、まずは皆でそこに行き、静かに竹が風にそよぐ音を聴いた。これは、学生達に繊細な音を聞き分ける耳を持ってほしいと



▲写真１　皆でつくった竹筒の楽器の一部
右の３本は下の節だけ残して上の節は抜いてある

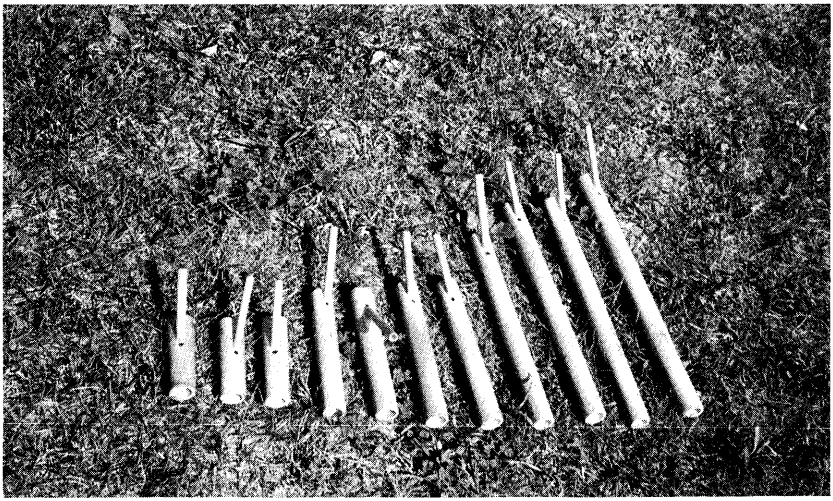
いうことと同時に、必要があっての事ではあるが、命ある竹を伐り倒した我々が、それを使って自分の、或いは自分達の音を生み出す事は、伐り倒した竹の命をも蘇らせるのだということを、それぞれの感覚で受け止めてほしかったからでもある。

さて、この竹を使って、はじめに写真１のような筒の楽器を作った。これは半分に割るとコップのような形であり、底を地面或いは硬い物に打ちつけると、筒の長さに応じた音程の良い音がする。皆それぞれ、自分なりに納得できる音のでるものを、まずは作ったのである。

次に、この竹筒のみを使って、即興的なアンサンブルを行なった。このアンサンブルを行なうにあたって打ち合わせたことは、お互いに良く聴き合い、気持ちを推し量りながら、それぞれ自分なりのリズムで呼びかけ合い、応答し、発展させる事だけで、曲の始まりや終わり、また強弱等については、その場の皆の雰囲気の中で全く自由にやってみた。

はじめは、遠慮がちだった学生達も、次第に、心或いは体の中からリズムが湧き出てくるようで、さらにはそれが拍子へと発展し、結果として、リズムの大合奏になった。何回かやっているうちに、慣れてきたことと、お互いの個性を徐々に理解し合ってきて、即興的アンサンブルではあっても、同じメンバーで合奏している限り、少しずつまとまりが感じられるようになってきた。

この段階で学生達は、それぞれ自分なりの感じ方で、アンサンブルに加えるための新しい音を欲するようになった。これに従って、竹筒については、もっと音程の異なったもの、また竹を打ち鳴らすようなもの、そして写真2のような笛もつくられるようになった。そして、笛のみの即興的アンサンブル、また、様々な楽器を使ったものも行なわれるようになった。学生の数も、いつの間にか他学部の聴講生も含めて、授業を始めた当初の倍以上に脹れ上がっていた。



▲写真2　皆でつくった笛の一部

▲写真３　いつもの授業風景

夏が近付いた頃、四国でやはり手づくり楽器を主体にした音楽教室を開いている、私の友人から連絡があった。彼の音楽教室では、手づくりの弦楽器を主体としたアンサンブルを行なっているのだが、そこに十四歳の軽い自閉症の少年が通っている。彼によれば、その少年Ｉ君は、弦楽器ではとても合奏には入れず、打楽器ならばなんとか叩けるので、我々の即興的アンサンブルにＩ君を加えて、彼が主催するコンサートに出演しないか、との事であった。

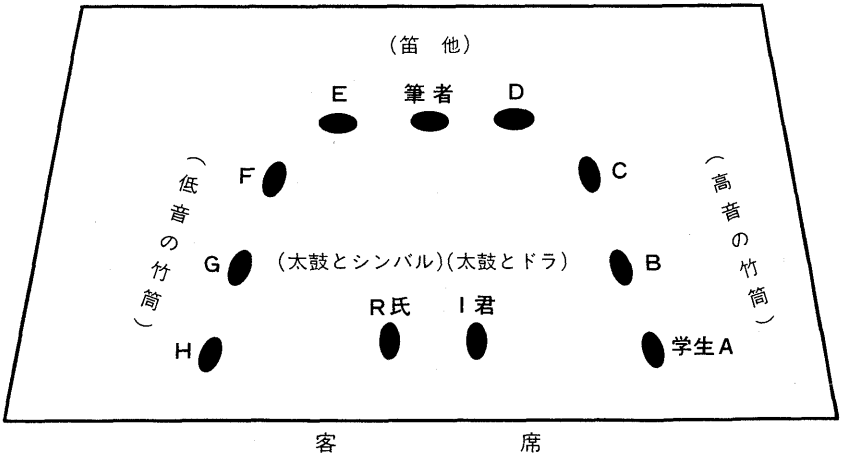
七月中旬過ぎ、合宿を兼ねて八人の学生と、四国へ渡った。コンサートの三日前である。

アンサンブルのメンバーは、Ｉ君、我々より二日前に到着してＩ君とリズム遊びをして過ごしていたプロの打楽器奏者Ｒ氏、八人の学生と私の十一名である。自分達でつくった楽器は全て持って行く等、万全を期した。しかし、Ｉ君との意思の疎通を得る為に、三日という期間は余りに短すぎた。Ｉ君の太

鼓を叩くリズムは、全く彼独自のものであった。それは、リズムに対する応答と言うよりも、アンサンブルとしてまとまりかけたリズムを、突き崩す役割を演じていた。

演奏は、下図のような体制でやることにした。演奏の内容については、可能ならば、曲の中に笛のみのアンサンブルを挟むこと、I君がドラを鳴らした時、この曲は終わるということだけを決めた。

さて当日、固唾を呑む五百人の聴衆の前で、演奏が始まった。普段と殆どかわらないように見えるI君、第三者から見ての成功、不成功はともかく、このアンサンブルを楽しもうと考えているR氏、不安顔の学生達、そして私の十一人の、それぞれの思いを乗せた音が、お互いの間を行き交う。それぞれが、竹筒や他の打楽器で自分のリズムを叩き、応答しながら、次第に笛担当の三人による合奏に移り、それに再び、竹筒や他の打楽器が加わり、自然に四拍子が生まれてきた。ここで、面白いことが起きた



▲コンサートでの演奏者の配置

のである。

練習では、学生達のリズムとI君のリズムが、まとまりと崩壊の二極を示していたのだが、この時、R氏以外に、学生の中からも、I君のリズムに対する応答が出てきたのだ。そして、合奏の中に、拍子でまとまろうとする力と、I君から発せられる、意表を突くようなリズムでの投げかけに応答しようとする、二つの力が、大きなテンションを生み出し始めた。さらに、この二つの力が、テンションを孕みながら歩み寄りを見せ始めた。I君のリズムに応答しながら、その中に拍子を見出し発展させる、するとまた、I君からの投げかけがあるということが、何回か繰り返された後、たいへんな盛り上がりになった。そして、皆が渾身の力を振り絞るようにして、もうこれ以上続けるのは精神的にも体力的にも限界となった、まさにその瞬間、このアンサンブルに表現された、十一人のメンバーの全ての思いを受け止めたとしか言いようのない、見事なドラが、一発、鳴った。I君がドラを鳴らした瞬間から、その音が消えるまで、ホール全体が、身じろぎ一つ、息一つできないほどの張り詰めた空気に包まれた。音が消えた後、やっと、我々を含めた会場中の人間が、息をつくことができた。万雷の拍手をいただき、大成功だった。しかし、この時我々が経験し得たものは、大成功か否かということとはもっと別のところにあった。

それは言葉による意志の疎通が難しいI君をも加えた、性格も年齢も異なった十一人の人間が、このような仕方の中で、自分自身のリズムを持ちながら、お互いの存在と違いを認め合い、そのうえで共感し合い高め合い、共存し得る、心の接点を見出せる実感とでも言えるだろうか。

現在も、この授業は、試行錯誤を繰り返しながら続いている。

（聖学院大学）

註（1）渡辺護『音楽美の構造』（昭和四十四年、音楽之友社）六十三―八十一頁。